

佐藤愛子

Sato Aiko

樂天道

らくてんどう

海竜社

樂

らくて

江苏工业学院图书馆

藏书章

佐藤愛子

海竜社

[著者紹介] 佐藤愛子(さとう あいこ)

1923年(大正12年)、大阪に生まれる。甲南高女卒業。

1969年(昭和44年)、『戦いすんで日が暮れて』で第61回直木賞を、1979年(昭和54年)、『幸福の絵』で女流文学賞を、2000年(平成12年)、『血脈』で、第48回菊池寛賞を受賞。ユーモア溢れる世相風刺と、人生の哀歎を描く小説およびエッセイは多くの読者の心をつかむ。

著書に『私の遺言』(新潮社)、『血脈』、『わが孫育て』、『院長の恋』、『我が老後』シリーズ——『我が老後』、『なんでこうなるの』、『だからこうなるの』、『そして、こうなった』、『それからどうなる』、『まだ生きている』(以上、文藝春秋)、『こんなことでよろしいか』、『これが佐藤愛子だ』自讃ユーモアエッセイ集シリーズ(ともに集英社)、『日本人の一大事』、『古い力』、『女の背ぼね』(以上、海竜社)ほか多数がある

らくてんどう  
楽天道

二〇〇九年 九月 十七日 第一刷発行

著者||佐藤 愛子  
さとう あいこ

発行者||下村のぶ子

発行者||株式会社 海竜社

東京都中央区築地二の十一の二十六 〒一〇四—〇〇四五  
電話 東京(〇三)三五四二—九六七(代表)

FAX (〇三)三五四一—五四八四

郵便振替口座||〇〇—一〇—九—四四八八六

出版案内||<http://www.kairyusha.co.jp>

電算写植||株式会社 盈進社

印刷||半七写真印刷工業株式会社

製本所||大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えます

©2009, Aiko Sato, Printed in Japan

ISBN978-4-7593-1091-7

まえがき

佐藤愛子

このエッセイ集は私が五十代から六十代にかけて書いた作品の中から、海竜社の平山女史が「コレ」と思われたものを選び出して編纂されたものである。従ってここに収録されているものは、平山女史のメガネにかなったものであり、必ずしも私自身がよいと思っているわけではない。

何しろ二十年前から三十年前に書いたエッセイであるから、殆ど忘れていた。集められたものを改めて読んで、「いやはやいやはや」と思ったり、「うーん、この頃は弾んでいたなあ、それにひきかえ今は……」と悲哀を噛みしめたり、「くどい！へたくソ！」と恥かしく思ったり、いろいろな想いがきたが、それでもともかく、「ま、いいか！」と今は満足に近い気分である。

昔の写真を見て、

「ああ、この頃は若かったなあ、それなりにキレイだったなあ」

と惚ぶように。今見ればグサイと思われる服に、冴えないヘアスタイルをしているが、それなりにキレイなのは若さの力か……としみじみ嗟歎する時の気持と似ている。

だがひとつ気がついたことは、文章技術は措くとして、私の考え方・人生への姿勢は変わらず一貫しているということだ。昔も今も全くブレていない。まっすぐ、まっしぐら、人は何と思おうと私は私の信念をもって書き、且生きてきたという姿勢を通して。そこでタイトルを「楽天道」とつけた。楽天は私の人生を支えてきた主義だ。次々に襲ってきた艱難辛苦かんなんしんくに負けずに今日八十五歳まで生きてこられたのは、楽天主義のおかげである。ならば「楽天主義」というタイトルにしてもよいようなものだが、あえて「道」としたところに、私の楽天に対する並々ならぬ思い入れがあることをご理解いただきたい。

例えば柔道。これはただのスポーツではないゆえに「道」がついている（剣道もたしかりだ）。柔術によって身心を鍛え人格を高めることを目的にするべきであるという考えから、あえて柔道と名づけられた。だからスポーツの祭典であるオリンピック

ツクの種目にするには柔道の本道に反することなのだ。勝ってバンザイと躍り上るなどとんでもない。勝っても負けても（本来の目的が勝負勝ちにあるのではない、修行の道なのであるから）、泰然として礼を交せばよろしいのだ。

ここに楽天主義ではなく楽天道とつけたのは、ノホホンと楽天的でいれればいいというのではない、それは人生修行の一手段、悲運を克服しそれなりの幸福を目ざすための修行として、楽天に向う道である、と考へてのことだ。

「そんなことをいうが、本文を読むと、どうも他愛なくて、とても修行の本とは思えないよ」

といわれるか？

もしそうであれば、熟読じゆくどく玩味がんみの熱意不足のためか、と反省していただきたく、それでもダメなら、ごめんなさい、私が悪うございました、未熟でした、と恐懼きょうくして謝ります。

楽天道\*目次

まえがき……………1

一章 五十からの底力

後ろ姿を見よう……………10

五十歳の自尊心……………19

使用前・使用後……………25

本舞台……………32

女はいい……………37

## 二章 六十代の誇り

性欲と記憶力……………	44
哀しい笑い話……………	51
患者の心得……………	57
話したってムダだ！……………	63
へトへト……………	70

## 三章 めげない老い

処女、美女、熟女……………	78
むつかしい年頃……………	84
何が敬老の日だ！……………	91

腰に鉞はさみ、手に拡大鏡……………96

#### 四章 親のツトメ

残もったいしたらいけません……………104  
勿もったい体ない病……………111  
この頃の親心……………115  
子を叱る……………119  
なにとぞ一杯のお茶を！……………123  
子供の心に何を残すか……………127

#### 五章 女のおかしさ・男のおかしみ

女のおかしさ・男のおかしみ……………132

## 第六章 楽天的知恵

新釈・舌切雀	141
黄金時代	146
魅力ある人	151
男らしさ	155
寧丸に面目を与えよ!	162
らしい	170
姑の歌	176
病弱について	181
世を生きる知恵	186
楽天	191
笑ってはいるけれど	194

## 七章 こんな一言

生きる道	198
私の幸福	204
家庭教育、かくて、かくある	209
感無量	212
男の男たるどころ	217

装訂……………アトリエMJK・三村 淳

---

## 一章

# 五十からの底力

---

## 後ろ姿を見よう

十年、もつと前のことになるだろうか。新聞が五十歳の女性のことを「五十歳の老婆」と書いているのを見て、老婆とは何ごとかといつて怒っていた人がいた（たしか作家の壺井栄さんだったと思うが、記憶は定かではない）。そのとき、私は今より大分若かったから、なるほど五十歳の女の人の意識というものはそんなものかと面白く思っただけであった。

ところが今、自分があと二、三年で五十の声を聞くという年になってみると、なるほど老婆という言葉は胸を刺し貫く。実際、老婆という言葉はひどい言葉だ。この言葉には白髪しろがをひつつめにして、曲った腰でヨタヨタと歩いているおばあさん、お化けのつづらのそばで腰を抜かしている舌切雀したきりすずめのおばあさんのイメージひそが潜んでいる。

今ではよほど田舎へでも行かない限り、そういうおばあさんはいなくなつた。五十歳はおろか、六十歳、七十歳の女性でも老婆という言葉はそぐわない。抜けた歯は入歯で整え、白髪は染め、重労働のために腰が曲つていたりということもなくなつた。八十近くなつても薄化粧の似合う人が大勢いる。昔は五十を過ぎて化粧をする

と、  
「いい年して皺しわの中に白粉おしろいブチ込んで」

とか、

「粉ふきばばあ」

などといわれて恥じねばならなかつたのである。

医学の進歩と生活のゆとりのおかげで、男も女も若さを長く保つことが出来るようになった。これはたしかにめでたいことだ。二十歳の娘の洋服を四十歳の母親が着てもおかしくないということは、第一、経済の上でも結構なことといえるのである。しかし何といつても一番よいことは、若々しく見えるということが、精神に弾力を与えるということだ。おしゃれでない人よりはおしゃれな人の方が弾力性がある。私は前に、中年女特有ののたのた歩きのことを、「お寺詣りの足どり」と書いた

が、おしゃれな人の「お詣り歩き」というのはあまり見たことがない。

若い頃のおしゃれは、「美しく見せる」ことが目的である。しかし中年のおしゃれは、人にどう見られるということよりも、心にハリを持たせ自分を励ますことに意味があるように私は思う。私は夫の倒産で無一文になってから、赤い服を着るようになった。それまでの私はどちらかというと地味好みで、黒か茶系統の服ばかり着ていたのだ。それが急に派手になったので、人々は驚いて、

「ボーイフレンドでも出来たのではないか」

などといったが、下衆げすの勘ぐりとはまさにこういうことをいう。昔むかし、齋藤さいとう別当実盛べっとうさねもりは源義仲との戦いに七十三歳にして白髪を染め、錦のひたたれを着て出陣したという。まさに私もその実盛の心境で、我と我が身を励まして苦境と戦い、勝つために錦のひたたれを身につけているのである。

ところである時、ある独身の中年婦人が来て笑いながらこういうことをいった。

「昔なら私ぐらいの年の女はもう孫も出来ておばあちゃんと呼ばれ、自然に年よりの世界に入って行けたんでしようけれど、こうして一人で若い人たちの中に入って仕事をしていると、いったいいつ頃から年よりらしくすればいいのか、その見当が

つかないで困ることがあります」

いつまでも若いのは結構だと簡単にいうけれど、本当に女らしい聡明な女性というものはそこまで考えるものなのかもしれない。

実際、上手じょうずに年をとるといふことは考えてみると、大へん難しいことだ。いかに上手に年をとって行くかといふことで、女の値うちといふものはきまるのではないだろうか。それはいかに自分を客観視し、いかに自分を知っているかといふこともつながることなのである。

あるところに一人の平凡な女性がいた。容色、才能、境遇、すべてに凡庸ぼんような女性である。その人が三十歳を過ぎてから、ふと思いたって隆鼻術をした。隆鼻術の次に眼を二重まぶた瞼にし、その次に皺取り手術をした。そうしてその結果、彼女は「マネキン人形のような」美人になったのだ。

彼女は四十八歳なのに三十五歳くらいに見られた。時によっては三十歳前に見られたこともあるという。クラス会などで彼女が現れると他の女性は一瞬、息を呑のんで見つめる、とも聞いた。あまりの彼女の変りよう、人形のような美しさ、年齢不

明の若さにただただキモをつぶすばかりなのである。しばしキモをつぶしてから、漸く人々は気を取り直し、それから彼女の美しさと若さの秘密を見抜いてやろうという欲求にかられた。

ある者は彼女は眼と鼻を手術しただけでなく歯を全部抜いて入歯にしている、といい、ある者は彼女の足はもつと大根足であった筈だ、きつと足の肉も取ったにちがないといい（そんなことが本当に出来るのか出来ないのか私は知らないが）、ある者はあの皺ひとつない、シミひとつない陶器のような肌は、ファンデーションを少なくとも二ミリは重ねたアツ塗りのおかげであるといった。するとまたある人は、私のイトコは彼女の近所に住んでいるが、そのイトコがいうには、表で車を掃除している時の彼女をある朝早く見かけたが、その顔たるや朝日の中では見るもいたましいものすごい顔であったということである、と囁いたりする有さま。

こういうことを書くと、だから女は嫉妬心が強くていやらしい、というムキもあるかもしれないが、彼女のありかたに、そういう取り沙汰をさせる要素があることもまた事実だと私は思う。それはもしかしたら彼女の美しさと若さに不自然なものがあるためではないだろうか。多分、彼女の若さは、「生きるため」の若さではなく